

こんな本があります 渋谷の水を知る本

分類	資料名	編著者	出版者	出版年
S71	施工中に在る渋谷町水道	渋谷町臨時水道部	渋谷町臨時水道部	1922
S71	渋谷町水道概要 昭和6年3月	渋谷町	渋谷町	1931
S71	代々幡町水道小誌		東京府豊多摩郡代々幡町水道事務所	1932

玉川上水関係

S13	渋谷の玉川上水 改訂版		渋谷区教育委員会	1986
S18	江戸上水道の歴史	伊藤 好一	吉川弘文館	1996
S13	玉川上水 橋と碑と	養田 たかし	クオリ	1993
S13	玉川上水 水と緑と人間の賛歌 増補	アサヒタウンズ	けやき出版	1993
S13	玉川上水と分水 新訂増補版	小坂 克信	新人物往来社	1995
S13	図解・武蔵野の水路 玉川上水とその分水路	渡部 一二	東海大学出版会	2004
S13	玉川上水の石樋と木樋	渋谷区立小学校教育研究会社会科研究部	渋谷区教育委員会	1985
S13	武蔵野台地南部の水利用の歴史 玉川上水と分水を中心に	小坂 克信	とうきゅう環境浄化財団	2006
S13	玉川上水通船史料集	玉川上水通船研究会	たましん地域文化財団	1998
S13	江戸の上水と三田用水		三田用水普通水利組合	1984

渋谷の川関係

S13	「春の小川」はなぜ消えたか 渋谷川にみる都市河川の歴史 (フィールド・スタディ文庫)	田原 光泰	之 潮	2011
S13	「春の小川」の流れた街・渋谷 川が映し出す地域史 特別展	白根記念渋谷区郷土博物館・文学館	白根記念渋谷区郷土博物館・文学館	2008
S13	あるく渋谷川入門 姿を隠した都会の川を探す	梶山 公子	中央公論事業出版	2010
S13	川跡からたどる江戸・東京案内	菅原 健二	洋泉社	2011
S13	渋谷の湧水池	渋谷区教育委員会	渋谷区教育委員会	1996
S13	渋谷の橋	渋谷区教育委員会	渋谷区教育委員会	1996

上記以外の参考文献：『東京近代水道百年史』 東京都水道局 1999
『新修渋谷区史』 渋谷区 1966

しぶや、あの日 あんなことそして こんな本

— 渋谷区地域資料通信 9 —

2021年8月25日

編集/発行 渋谷区立中央図書館 (株)図書館流通センター

渋谷区神宮前 1-4-1 3403-2591

図書館ホームページ>しぶやのページ

https://www.lib.city.shibuya.tokyo.jp/?page_id=209

しぶや、あの日 あんなことそして こんな本

渋谷区地域資料通信 9

江戸時代の渋谷区域内には江戸の街の生活用水であった玉川上水が流れていました。関東に移封された徳川家康は江戸を本拠と定め、良水が得られなかった城下への上水確保に乗り出します。天下の中心となった江戸は急速な拡大を続け、さらに増す水需要へ対応するため新たな上水の増設を必要とし、4代家綱の時代に玉川上水が開削されることとなります。玉川上水は区内では幡ヶ谷・代々木地域を流れ、新宿の四谷大木戸からは地下へと引き込まれて、江戸の町の上水井戸へと給水されていました。明治以降も上水として利用されていましたが、羽村から四谷内藤新宿まで船の運航が認められたり、水質は悪化したり、東の改良を迫る一方に、京府は水道られ、明治19年(1886)に流行したコレラが一層の拍車をかけることになり、明治25年には淀橋浄水場の建設に着手、近代水道整備の緒につきます。この浄水場への新たな導水路として代田村から笹塚・幡ヶ谷・本町を貫き建設されたのが玉川上水新水路です。新水路も昭和になって役割を終え、道路に変わり、通称「水道道路」と呼ばれるようになりました。

江戸の水、渋谷の水

大正末期、東京市郊外であった三町時代の渋谷区域でも市街地化が進み、飲料水を安定的に供給するための水道敷設が急務となります。渋谷町の町営水道は今から100年前の大正10年(1921)に起工され、13年に全工事を終了しました。東京府下の町村では渋谷町の町営水道が近代水道の最初となりました。千駄ヶ谷町では昭和4年(1929)、代々幡町では昭和6年から町営水道の給水が始まります。昭和7年の東京市渋谷区の成立に伴い、町営の水道事業は東京市水道に統合されていきます。

明治期から生涯を渋谷に過ごした田山花袋は『東京の三十年』の「川ぞひの路」の中で「玉川上水は美しい水彩画のやうな光景を次第に私の前に展けて来た。櫓の林があると思ふと、カサカサと風に鳴る萱原がある。」と描写しています。現在、緑道として整備されている玉川上水旧水路跡を往時の光景を思い浮かべながら辿ってみるのはいかがですか。

渋谷町が駒沢村(世田谷区)に建設した給水塔▶



東京都水道局提供

玉川上水新水路

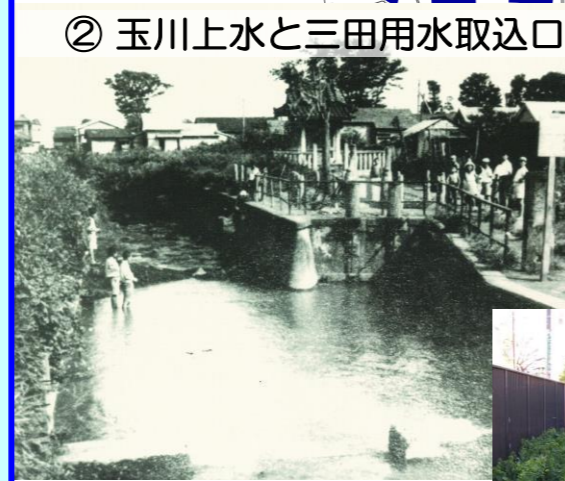
明治26年（1893）に東京市の淀橋浄水場建設に伴い、新水路が開削されることとなります。新水路は蛇行する玉川上水を避け、現在の和泉給水所地点から笹塚・幡ヶ谷・本町をとおる淀橋まで直線的に建設される築堤上を通すもので、築堤建設には淀橋浄水場を掘った時の出土が利用されました。同31年に完成しますが、新水路は関東大震災による破損などもあり、昭和12年（1937）に甲州街道下に導水暗渠が完成して廃止されます。廃止後の水路跡は道路や都営住宅用地として整備され、道路は通称「水道道路」と呼ばれるようになります。淀橋浄水場は昭和40年（1965）に約70年の歴史を閉じ、新宿副都心として生まれ変わりました。なお、新水路建設時には3か所の隧道と16の橋が設けられました。三つの隧道のうち本村隧道は当時のまま残っており、淀橋側から番号を付られた橋は4号から13号橋までが区内にあり、その名は「六号通り」や「十三号通り公園」など通り名や公園名に名残を留めています。



① 笹塚付近の玉川上水新水路



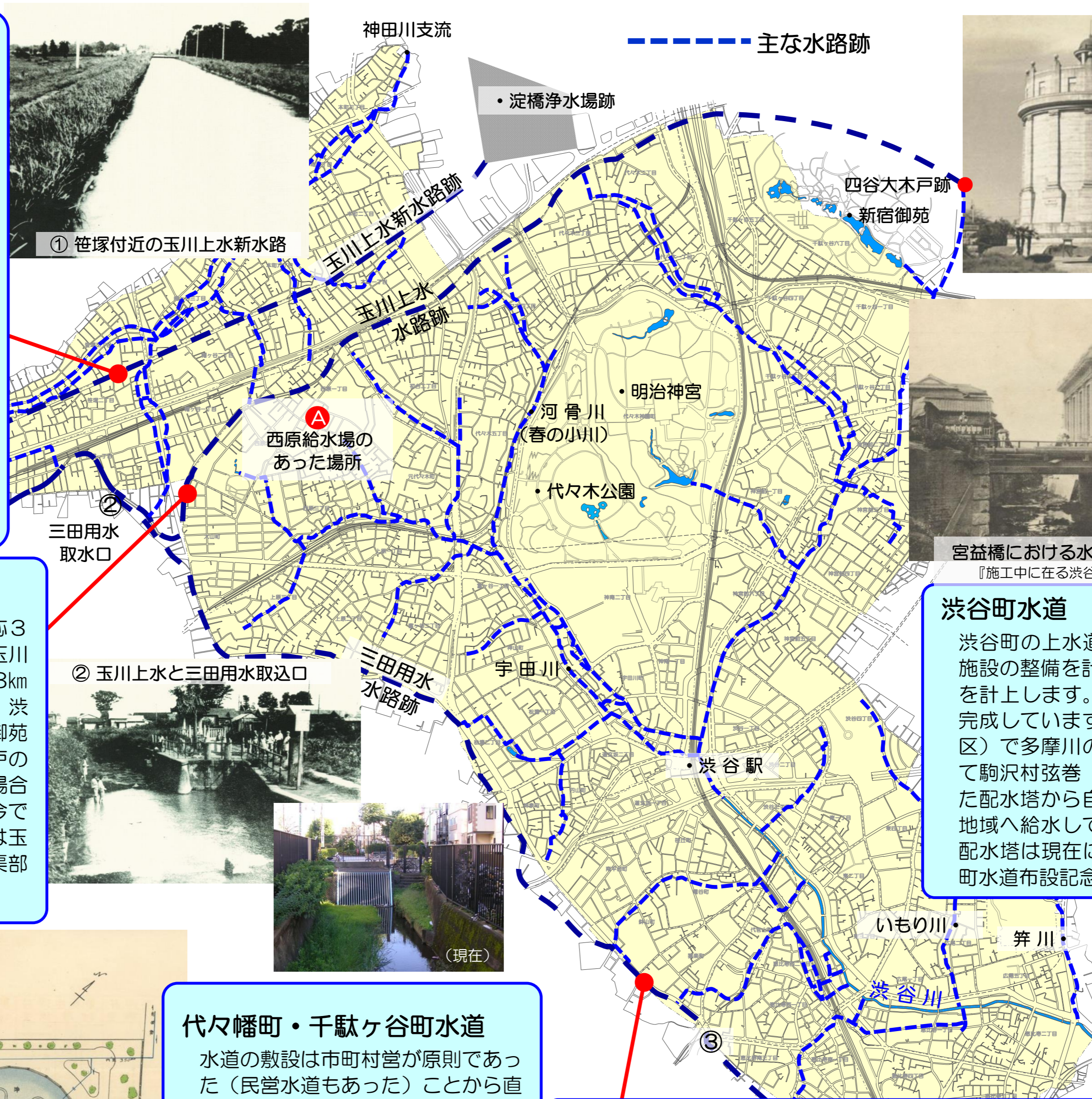
② 三田用水取水口



② 玉川上水と三田用水取水口



(現在)



--- 主な水路跡



渋谷町が建設した駒沢の給水塔
(建設当時)
東京都水道局提供



宮益橋における水管橋架設工事
『施工中に在る渋谷町水道』より



駒沢の給水塔と記念碑 (現在)
東京都水道局提供

玉川上水

玉川上水は玉川庄右衛門、清右衛門兄弟によって、承応3年（1654）に7ヶ月ほどの工期で完成されました。玉川上水は多摩川の羽村取水口から四谷大木戸までの約4.3kmを約90mの高低差を利用して自然流下させています。渋谷区内では笹塚・幡ヶ谷・代々木地域をぬけ、新宿御苑の北側を通り四谷大木戸からは石樋・木樋によって江戸の町の地下を巡り給水されていました。水量が多すぎる場合は余水を渋谷川に落水させていました。玉川上水路は今でも笹塚駅付近の一部が開渠として残り、あとの大部分は玉川上水旧水路緑道として整備されています。なお、開渠部分は国の史跡に指定されています。

渋谷町水道

渋谷町の上水道は大正6年（1917）に町独自の水道施設の整備を計画し、同9年に総工費496万円の予算を計上します。工事は10年に着工し13年に全工事が完成しています。水道は当時の北多摩郡砧村（世田谷区）で多摩川の伏流水を取り込み、砧浄水所で濾過して駒沢村弦巻（世田谷区）の給水場に送水、汲み揚げた配水塔から自然流下で渋谷町内及び目黒町など周辺地域へ給水していました。給水場に建設された二基の配水塔は現在に残り、昭和2年（1927）には「渋谷町水道布設記念碑」（写真）が建てられています。



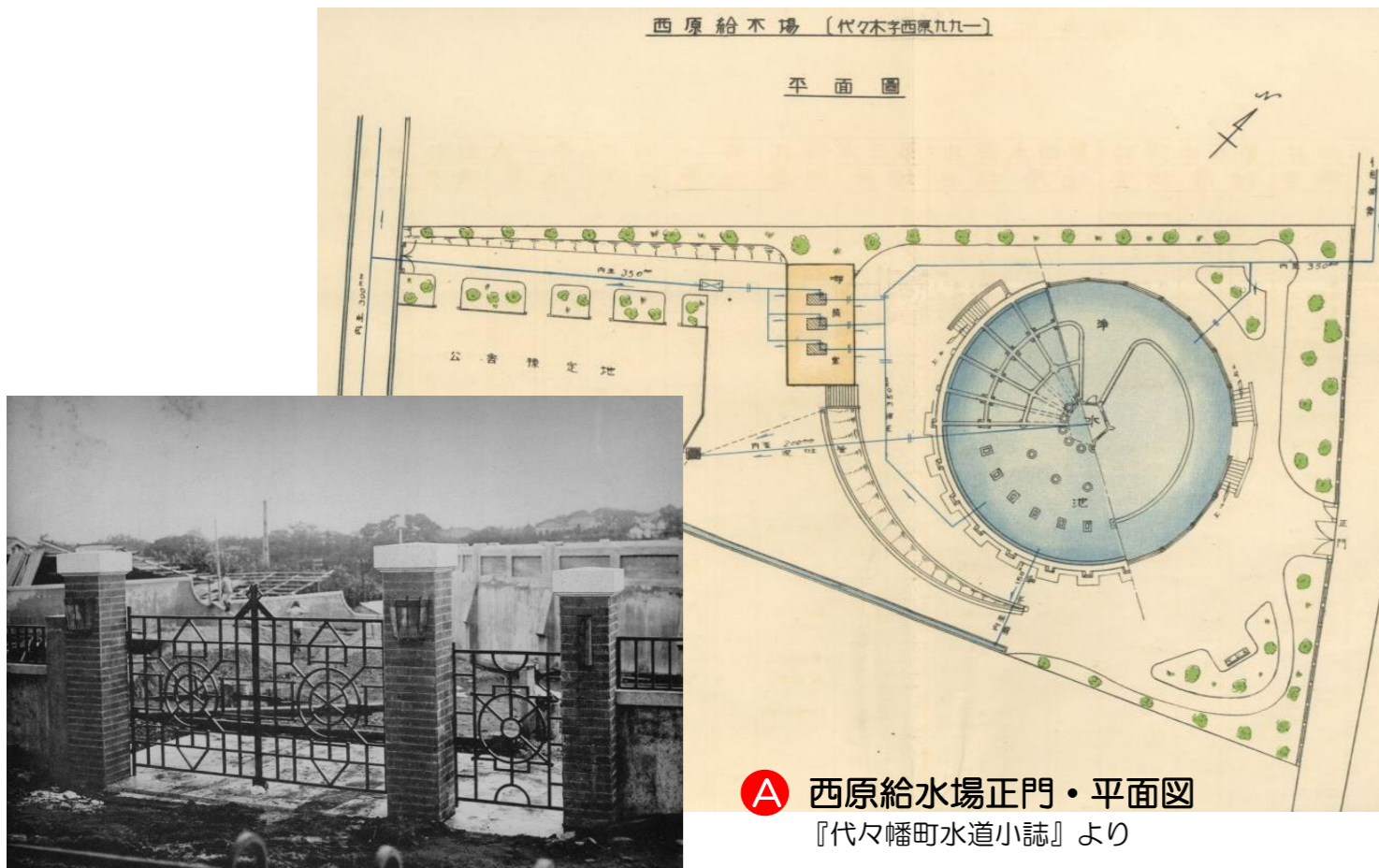
③ 駒沢通りをまたぐ三田用水の鉄樋

代々幡町・千駄ヶ谷町水道

水道の敷設は市町村営が原則であった（民営水道もあった）ことから直営水道として計画され、代々幡町では昭和6年（1931）から給水を開始しています。水源は町内4か所、和田堀町の3か所に掘った井戸とし、西原の給水場から給水を行っていました。千駄ヶ谷町では四谷区・赤坂区に隣接していることから東京市水道からの給水を受け、一般給水分は昭和4年に始まります。

三田用水

三田用水は、はじめ笹塚付近の下北沢で玉川上水を分け、下北沢・代々木・中渋谷をへて三田・目黒・白金方面への給水を目的に寛文4年（1664）に三田上水として開削されました。上水路は渋谷川水系と目黒川水系の稜線上を流し、享保7年（1722）に上水としては廃止されますが、灌漑用水として利用していた村々からの願い出により三田用水として残されます。明治以降も渋谷川水系への落とし水の落差を利用した水車や工場の動力源として利用されるほか、恵比寿の日本麦酒醸造会社や目黒火薬庫などの工業用水として戦後まで利用されていました。



A 西原給水場正門・平面図
『代々幡町水道小誌』より